



第3号
 編集発行／碧南市
 哲学たいけん村
 無我苑
 所在地／碧南市坂口町3-100
 〒447：TEL 0566-41-8522
 ：FAX 0566-41-7761



『研修道場安吾館での哲学講座風景』

特集

哲学講座

「近代日本の思想(1)(2)」

平成五年五月～平成六年六月

「近代日本の思想(1)(2)」講義のテーマと講師

| 講義テーマ | 講師名・(敬称略) |
|-------------------|---------------------|
| 日本思想史における近代 | 国際日本文化研究センター 久野 昭 |
| 明六社 | 東洋大学 小池 嘉明 |
| 北村透谷 | 金城学院大学 深萱和男 |
| 日本浪漫派 | 国際日本文化研究センター 鈴木 貞美 |
| 三木清 | 和歌山大学 永野基綱 |
| 西田幾多郎以前 | 中京女子大学アジア文化研究所 久野 昭 |
| 西田幾多郎『善の研究』 | 広島大学 古東哲明 |
| 西田幾多郎『行為と直観』 | 大阪大学 中岡成文 |
| 和辻哲郎『風土』 | 広島大学 品川哲彦 |
| 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』 | 大阪大学 鷲田清一 |

平成五年五月より開講しました哲学講座「近代日本の思想」が、平成六年六月をもちまして終了いたしました。

受講者は、三十才代から八十才代の男性が多く、多忙な日常生活の中で、意欲的に学びの場を求め、自己の内面生活の充実や生活の深まりを追求されている様子がうかがわれました。

講師の先生方も、それに応えるべく、現代社会の環境問題、臓器移植等、今日的な話題に結びついたり、あるいは、長年親しんできた源氏物語や徒然草、童話などからも例を引いてくださったりして、大変わかりやすく、熱意あふれる講義をしていただきました。

次に、講義内容の要約と、受講者の方のご意見、感想を掲載します。

近代日本の思想(1)

明治維新という時代転換の後、日本は西洋の影響を大きく受けはじめた。日本人が西洋型の学問としての「哲学」を受け入れるようになったのも、明治以降である。その「哲学」の受容とその日本的な変容を軸に近代日本の思想のありようを考えるべく、「近代日本の思想」というテーマを設定した。これは一回の講座では片付けきれない大きなテーマであるから、今回は「哲学」という学問の領域を超えて、一般に近代日本の思想が西洋の思想の影響下に抱えざるをえなかった問題を浮かび上がらせることにした。

日本国思想の近代

日本の近代の起点となったのは明治維新である。幕藩体制下には死んでいた天皇親政の理念を再生せしめた時代が、日本の近代といってもいい。あるいは、西洋近代の技術文明をモデルにして、それを急速に日本に定着させた時代が、日本の近代であったといってもよからう。

この西洋近代の技術文明自体、ヨーロッパ的な発想や思想、価値観の中から生まれたものである。その成果のみを、それを生み出した土壌から切り離した形で急速に取り入れようとした和魂洋才の姿勢には、無理があったはずである。近代日本の思想は、西洋流の進歩の観念と、それに対する反発という二つの軸を持つことになった。そこから生じた近代日本

の思想的な問題を浮かび上らせるための目安として、維新直後に西洋型啓蒙主義の拠点としての役割を演じた明六社、キリスト教の影響を受けつつ西洋と東洋との思想的な対話を自らの課題とした北村透谷、西洋的なロマン主義を日本的な伝統のうちに生かそうとした日本浪漫派、そして西洋哲学を研究しながら幅広く文化の問題に眼を向けた三木清を、今回は取り上げた。

明六社

明治六年七月に発足した明六社は、月に二、三回発行、計十万余部に上る『明六雑誌』を刊行、雑誌のテーマは大きく分けると、キリスト教への対応を軸にした精神問題、もう一つは民権や国会開設などに関わる制度問題。そして、この雑誌に拠った啓蒙思想家の一人に、森有礼がいた。

森は、明治二年に廢刀令を提出して否決され、『明六雑誌』には「妻妾論」を連載して、日本の夫婦関係の不道德を攻撃し、夫の義務、妻の権利を主張している。徳富蘇峰の評を借りれば、森は、「大いなる刺激者」であり「旧習の破壊者」である。福沢諭吉によれば、森は卓説の主張者だが、緩急を心得ていない。革命には体制の破壊者と建設者が要るが、啓蒙運動の場合も同様で、森が破壊者、福沢が建設者の役を演じた。明六社はいわば近代日本の縮図であったと言つてよい。



北村透谷

明治二十一年、キリスト教への入信と石坂ミナとの結婚を機に、北村透谷は政治活動から離れて文筆活動に入る。透谷について、特に問題にしたい作品は、明治二十五年に『女学雑誌』に発表された「厭世詩家と女性」である。この作品は島崎藤村の『桜の実の熟する時』（大正八年）に、大きく影を落している。

厭世詩家が恋愛を全うしないのは何故か。想世界が実世界とぶつかりあつて否定されるという少年の経験にとつて、恋愛は救いになる。だが、それが結婚ということになると、また実世界の煩わしさにおつかる。そこで、詩人は相手の女性を醒めた眼で見るようになり、実世界に背く。透谷は想世界と実世界の矛盾を、恋愛を軸に語った。一方で恋愛を謳歌しながら、他方で恋愛を貫徹できない詩人の宿命を自覚していた。「厭世詩家と女

性」の時代的意義の大きさは、島崎藤村や木下尚江に与えた衝撃からも窺われる。

日本浪漫派

昭和八年以降、左翼運動からの転向者の続出するなかで、保田與重郎や亀井勝一郎らを中心に雑誌『日本浪漫派』が創刊されたのは、昭和十年であった。この雑誌を手掛かりに、ヨーロッパのロマン主義と対比する形で、保田のロマン主義の思想的意味を問題にしたい。

保田與重郎の出発点は、マルクス主義を背景にした原始共産社会への憧れと、ドイツ・ロマン派への共感であった。彼がマルクス主義から離れていった要因として、一つは近代への絶望から、日本の古典を手掛かりに、すでに失われた日本の古代の美への憧れ、滅びゆくもの、近代が見捨てたものの美しさへの憧れが強まったこと。もう一つは、ヨーロッパ中心主義への疑惑の中で、彼自身の西欧への憧憬から訣別し、西洋近代を相対化するはたらきが日本的伝統の発見に向かわせたことを、指摘できる。

西洋近代的自我をどう超えるかが課題となった保田は、この解決を、古代歌謡や『万葉集』などの古典に見られるような精神的共同性の世界に見出し、古代日本は、「言霊の幸ふ国としての日本」という形で理想化される。この言葉の持つ霊力による精神的共同性の世界では、「私」は無くなる。そういう霊力の媒介者として、古代への回帰による西洋的近代の超克を体現しようとしたのが、保田與重郎であった。

（三木清）

人間にとって言葉と心の関係は極めて重要であり、それは、三木清にとっても中心的な課題であった。

三木は『パスカルにおける人間の研究』で、心と言葉の関係をバトスとロゴスの関係として問題にしながら、バトスとロゴスの統一として人間を捉えようとし、パスカル論を通じて、歴史的社会的な場での具体的な人間存在に関する学問としての「人間学」(anthropology)を目指した。

西洋の近代を分裂の文化として捉えた三木は、心と形を統一するものとしての行為、実践、技術、制度の問題に注目したが、それは、彼の『構想力の論理』のテーマでもあった。ただし、当時の時代状況のもとでは、行為、実践にこの統一を求めようとするのは危険な試みであり、挫折せざるを得なかった。



近代日本の思想(2)

日本の近代思想史において、西田幾多郎と和辻哲郎は避けて通ることはできない。その資質において、非常に違いがあるにもかかわらず、二人共、自分自身の日本語で考え、日本人としての思想を展開した数少ない思想家だからである。導入として、この二人の前に、西周と大西祝を取り上げる。

（西田幾多郎以前）

西は、明治六年「生性発蘊」という論文の中でphilosophyの訳語として、初めて「哲学」という言葉を用いたが、本来「理学」「理論」と訳すべきだという。

明治二十年の「理の字の説」という論文によれば、「理」という文字の「里」の部分、田のふちに土が盛られ、それが畦道になることを表す。「王」の部分に元来は「玉」であって、その玉を磨くことにより露になつてくる紋様が「理」であり、それが道理、わけ、はず、という意味を有するようになる。

ところが、明治六年当時の日本はヨーロッパの近代技術文明をさかんに取り入れようとしている時であり、「理学」といえば自然科学を連想する風潮も生まれしてきたので、「哲学」という訳語にしたというわけである。

以上をふまえて、「倫理学」という言葉を考えてみると、一般には「倫理学」と理解されているが、「倫・理学」と考

えた方が適切に思われる。すなわち、人の集合体としての「倫」について考える「理」の「学」としての「哲学」という意味からである。

そして、近代日本において、倫理學らしい倫理學の出発点は大西祝である。

直覺説、形式説、権力説、自己的快樂説、公衆的快樂説等を論評しつつ、倫理的規範を明確にしようとする大西祝の『倫理學』は、彼の、夭折のため未完に終わっているが、同様の仕事、ほぼ十年後に西田幾多郎によって企てられ、明治四十四年に『善の研究』第三編として發表された。

（西田幾多郎『善の研究』）

『善の研究』の思索形式の一つは、脱ディコトミー（一体二重の思考法）である。通常なら互いに分岐しあう「主観・客観」「矛盾・統一」「自己・他者」などを、同じひとつのこの別様の現れとして考える思考法で、リアリティに忠実に生き、考えようとした幾多郎の当然の帰結といえる。

「純粹経験」というのは、ディコトミーを超越したリアリティを目標とする居住まい場所にして、かつ、そのリアリティのことである。これは、通常の状態では隠されているが、破局に追い込まれたときに突如あらわれる力量、本性のことであり、誰にもいつでも保持されている。その普段は気づかれないままの空白な透明な場所としての純粹経験が、ことさらそれとして発現するプロセスをコンセントレーション（虚心化・放心）といい、

心理學的にいう至高経験 (peak-experience) と重なり合う部分が多い。そして、最終的には「善」は「自己の実現 self-realization」ということになる。

（西田幾多郎『行為の直観』）

基本的用語を理解することから始める。

「限定」という用語は、個物の相互限定（人間が互いに働きかける）・個物の自己限定（人間が自分のことを決めていく）・一般者（世界）の自己限定（宇宙が形をとる）というふうに理解する。次に「行為」とは、自分が能動的に何かを行なうことと思われているが、実は私のイメージ（欲求）が私を動かしているのである。また「直観」というのは、普通、物があつて受動的に何かを考えさせられるか、思ったりすることのように考えられているけれども、そうばかりでなく、例えば「聞く」という行為も受動的な行為と思われがちであるが、話し手に或る影響を与える行為でもありうる。また、他の表現として、西田は、「直観」とは、「表現的媒介者（文化の型、伝統）の自己限定」ともいう。

「行為的直観」という西田独特の思想は、彼の中期から後期にかけての重要なもので、前期の「純粹経験」から発展したものである。彼は、われわれは「歴史物的物」の世界の中にある「歴史的身体」として物を作る。作られたものは、歴史的生命の自己表現として、形あるものとなる。これが行為によって物を見る（行為的直観）ということであると述べている。

【和辻哲郎「風土」】

昭和十年に出版された和辻哲郎の『風土』は、世界を風土上①モンスーン②砂漠③牧場の三類に分け、それぞれの風土から人間のあり方を考察している。

日本の風土は、モンスーン型に属し、人々は、受容的、忍従的な性向を持つ。家族は他の風土に比べて強く結合しているが、個人主義的、社会的な公共生活を営むことができない。このような見方は、一見常識的ともいえる見方である。何故、和辻はあえて哲学や倫理学の問題として風土をとりあげなければならないのかという問いが生ずる。

これは、近代の哲学・倫理学の歴史の中で、人間は風土の中で生きている・人間は問柄の中で生きている・人間は特有の歴史を背負って生きている、ということが軽視されており、だからこそ、和辻によってこれらのことが強調されるというわけである。

近代の人間像というのは、自由で、自分の意志で何でも決定しうる人間であるが孤立した自由な個人というのは抽象であり、人間の一部分にしかすぎない。和辻は、そういう抽象的な人間のみを考へることは間違っていると考へた。しかし、風土から日本を見ていくこと、人間を考へていくこと等は、和辻の没することのできない業績であるが、自然を過小評価していること、労働を軽視していること、時代的にファシズムに利用されやすい危険な面があったことなど、問題点もいくつかあげることができる。

【和辻哲郎「人間の道徳的倫理学」】

この著作は、昭和二十一年に出版された『倫理学』の序論ともいえるべきものである。そして、倫理学を考へるうえで「問柄」という概念をもちこむことによって、近代ヨーロッパの倫理学が対称的に論じてきた法と道徳、公共生活と個人の内面というような二分法の思考に対して、批判的な倫理学を提示するという意義を、認めることができる。

その第一章において、和辻は、「人間」という言葉が、「世間」と「人」との二重の意味に用いられていることに注目する。この二つの性格の統一として、人間存在を考へ、そういう考察に立つて人と人との問柄が強調される倫理学を主張するのである。けれども、人間の問柄とは、人と人との関係としての問柄でもあるが、また、人と人との間隙、すきまでもある。その間が、自己と他者を限定している。「人間関係が限定せられること」によって「自分が生じ他が生じる」わけである。

「倫」は、「なにかま」を意味し、同時にそのなかまの秩序も意味する。その「倫」の理倫としての「倫理」について、彼は、第一に、それが人間共同態に関わること、第二に、それが人間共同態の存在根底に関わることを指摘している。「倫理とは、人間共同の存在根底として、種々の共同態に実現せられるものである。それは人々の問柄の道であり秩序であって、それがあるゆえに問柄そのものが可能にせられる。倫理とは何ぞやという問いにおいて問われていることは、まさにこのよう

な人間の道にほかならぬ。次に、「問柄」が人格の存在の基盤であるとするなら、その根源的な自己や世の中が「存る」とこの意味を考へようとする。彼によれば、一切の「がある」は人間が「持つ」ことを根底とし、そしてかく物を「持つ」人間があることは人間が己れ自身を持つことに他ならない。そして人間が己れ自身を持つことを表わす言葉が、まさに「存在」なのである。和辻は、存在について考へる時、それを人間の社会的なあり方や行為連関として考へなければならぬと主張している。

このような和辻の存在への問いに対して、在るといふことの根源的な場所へ帰ろうとしながら、その都度、具体的な問柄の問題へ還元しているため、人間以前の原型に迫っていないという批判もある。

受講者の声

『善の研究』は以前読んだことがありましたが、難解で、結局何も理解できていなかったことがわかりました。古東先生のお話が大変理解し易く、これで『善の研究』のアウトラインがおぼろげながらもつかめました。読み直す時の手がかりにしたいと思います。年令的にも体験を通して、このような話が多少は理解し易くなって来ました。漫然と考へていたことも、論理的に思考を展開していくと心の世界が広がり気持ちも豊かになります。講師の先生方それぞれの熱意に感謝いたします。

ニュース&ガイド

平成六年五月二十日(金)チェコ共和国大使夫人ヴァスタ・ヴィンケルヘーフェロヴァさんが来碧され、哲学たいけん村無我苑、芸術文化ホール、市民図書館等を視察されました。そして、一地方都市碧南に、質の高い文化が育まれていることを印象深く心に留められた様子でした。一カ月後、夫人より、お便りと色紙を送って頂きました。色紙には、無我苑の瞑想回廊に掲げられている安部公房氏の『他人の顔』より引用されている「美とは、おそろく破壊されることを拒んでいる、その抵抗の強さのことなのだろう。再現することの困難さが、美の度合いの尺度なのである。」という言葉のチェコ語訳が自筆で書かれてありました。

この『他人の顔』という作品は、日本語に堪能な夫人が、チェコ語に翻訳されている作品の一つです。チェコ語には「隣人」という言葉はあっても「他人」という単語がなく、その翻訳には苦労されたとのこと、何となく暖かなお国柄が伝わってまいります。

